

染物製造

高林 晋 すすむ

日本橋浜町の街角に今も残る染元。その屋台骨を支える職方の歩みは、自らの道を切り拓きながら、江戸の文化と技を未来へ手渡している。



たかばやし すすむ ●
1967 年生まれ。
東京都中央区日本橋浜町 2-45-6



高橋欣也さんや高林さんが手がけた合財袋。手前の袋物はそろばん柄で、商売の中心地・日本橋を表している

求め続けたのは、ダイレクトな手ごたえ

日本橋だけでなく、浅草や渋谷など他の地域の人々とも積極的に交流するよう心がけているという。「その土地ごとの気風や文化に触れることで、自分の感性を磨いていきたい」



図案から染め、縫製まで幅広い仕事を手掛ける

江戸の粋や洒落が息づく半纏やのれん、手拭、袋物などの染物が並ぶ「濱甲高虎」。三階の畳敷きの作業場で、資料の山を背に奥の机に座るのが、ものづくりを担当する職方・高林晋さんだ。注文を絵師に伝えて図案を起こし、染めは染工場へ、仕立は縫製の職人へ……。そうした外注全体を采配し、お客と対峙するのが高林さんの仕事だ。そして自らも手を動かし、その一連の工程に関わっていく。「私の場合、一つの仕事に専門的に行う職人」というより「職方」という呼び名のほうがしっくりきます」と話す。

高林さんの経歴は少し異色だ。静岡県浜松市の出身で、美術高校・



型紙と紗の接着剤には漆を用いる。湿度の加減を調整しながら乾燥させ、紗に詰まった漆を落とすしていく

服飾専門学校で絵の基礎から裁縫まで幅広く学んだ。卒業後は広告代理店のデザイナーとして働き始めたものの、自分のアイデアが多くなるとは異なる形へと変わっていく現実には直面する。「それは仕事として当然なのですが、当時はまだ若くて呑み込めなかった。もっと自分の発想がお客様とダイレクトにつながるような仕事をしたと思うようになりました」。職人を紹介する

本を片手に、上野から日本橋方面へと歩き、版画の彫師や摺り師、着物物の紋を入れる紋章店などの戸を次々と叩いて回った。そして十軒目、ようやく受け入れてくれたのが濱甲高虎だったという。二五歳で働き始め、二代目の故・高橋欣也さんのもとで仕事のいろハを教わった。持ち前の好奇心に加え、美術やデザインのセンスと技術もあつたため、任される仕事は自然と広がっていった。「字を書く、絵を描く、型を彫る、紗張りをする、染める、仕立てる、営業する、販売する……本当に何でもやってきました（笑）」と高林さんは苦笑する。二〇一九年には、車庫を改装し、紗張りをする作業場を設けた。紗張りとは、型紙を彫ると図案の一部が取れてしまうため、細かな網状の

「紗」を貼って固定する工程のこと。「本来は紗張屋さんが担う仕事で、高虎がお願いしていた職人さんは八〇歳を過ぎた女性でした。コロナ禍で仕事が減り、閉業をと考えていたタイミングで、『あなたになら』と道具一式を譲っていただき、私が引き継ぐことになったんです」。真剣な眼差しで紗張りの作業をする姿は、職人そのもの。一転、客先に電話をかけて確認事項を伝える声は、明朗で歯切れのよい商人だ。千手観音のように多岐にわたる仕事をこなす原動力には、若い頃に求め続けた「ダイレクトな手ごたえ」があるのだろう。「自分が手がけたものがきれいに染め上がり、納めた先で『いいねえ』とおっしゃっていただけるのと、やっぱりうれしいですね」と、高林さんは微笑んだ。